

生研公開講演

## 「住まい方の文化」

dwelling form and culture

## 第五部 藤井 明 教授

第5部の藤井です。今日は「住まい方の文化」というテーマでお話をしたいと思います。

私は1972年に世界の伝統的な集落や住居の調査を始めました。もう25年以上続けているわけですが、その間に四十数カ国、集落の数にして400から500ヶ所を見てきました。今日はその中から比較的面白そうな20の集落を取り上げ、そこで人々がどのような住まい方をしているかを紹介し、人が住むということの意味について考える契機にしたいと思います。

世界にはさまざまな住居形式がありますが、それらを説明する際に、従来から用いられてきたのが『風土論』という考え方です。

この風土論はご存知の方も多いと思いますが、その端緒は和辻哲郎の『風土』です。彼はその本の中で風土を「その土地の気候や気象、あるいは地質、地味、地形、景観などの総称である」と定義しています。

彼の風土論を簡単に説明しますと、彼は昭和2年に文部省の在外研究員としてヨーロッパへ旅立っています。もちろん当時ですから船旅でして、東シナ海、南シナ海、インド洋、アラビア海、紅海を通過してスエズ運河に至り、そこを抜けてようやく地中海に到着するという、2ヶ月の長旅です。

このコースは、気候的には、アジアのモンスーン地帯からアラビア半島の乾燥した砂漠地帯を経て地中海の温暖な気候帯に至るもので気候のフルコースを巡る旅になっています。

彼はその最終目的地の地中海に着いたときに、同行していた京都大学農学部の大槻教授から、「ヨーロッパには雑草がない」ということを教えられて啓示にも似たひらめきを覚え風土論を展開するのです。

彼はそのときに、風土というのは人間の自己了解の仕方であるとみなし、人間が自分をどのように了解してそれをそれぞれの文化にどのように反映しているかということを考え始めます。

「ヨーロッパに雑草がない」というのは、いわば観念的な世界の話で、彼が言いたいのは本当に雑草がないという話ではなく、自然が極めて従順であるということです。

彼は風土論を展開するうちに、「人間存在の行動契機としての風土性」というものを考え、それを端的に表現するものとして『モンスーン型』『砂漠型』『牧場型』という3つの類型を提示しています。

『モンスーン型』は受容的で忍従的な性格をつくり、『砂漠型』は服従的で戦闘的な性格をつくる。これらに対して『牧場型』は合理的、人工的な人間を形成するとしていま

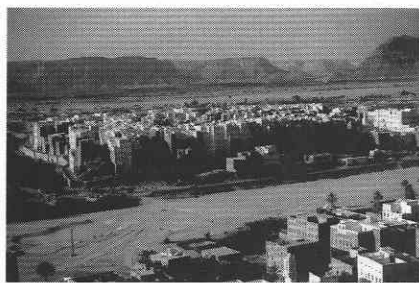


写真1 シバム (イエメン)



写真2 ハジャラ (イエメン)



写真3 サヌア (イエメン)

す。そしてこの風土の相違がそこに住む人々の気質に反映され、文芸、美術、宗教、風習等の人間生活のあらゆる表現の内に見出されるとしています。

彼の風土論において家屋の様式というのは、「家をつくる仕方の固定したもの」であって、「その仕方は、風土と関わりなしに成立するものではない」とし、「家をつくる仕方の固定は、風土における人間の自己了解の表現に他ならぬであろう」と結論づけています。

この考え方は、体験を観念的な世界像として提示したものとして達見で、また、実際に経験することともよく合致しているの、今でもこの本は読みつがれているのではないかと思います。

実際に世界各地の集落を調査した経験からいいますと、風土は確かに集落や住居の様式を規定する要因ではありますが、決して決定因ではないという感じがします。例えば、風土によって使用できる建材が限定されることはありますが、それがひとたびデザインとして外部に表れた場合には、住んでいる人々の意識とか意欲とか、そういうものが必ず何らかの形で介在し、風土と表現とが直截に結びつくという事は決してないように思われます。

日本の場合でも、例えば民家を見た場合に、山一つ越えると屋根の形が微妙に変わっていたり勾配が変わっていたりして、決して同じ表現ではないというのがすぐわかりますが、こういう表現の差異性は、かなり意図的に行われているのではないかという気がします。

和辻哲郎の風土論は、物理的な風土に基づく、いわばイデオとしての風土の類型化で、建築計画学的な見方からは少し不十分だと考えています。

その弱点は、同じ風土に異なる様式がいくつも併存している場合があるが、その説明ができない。それから風土の区分に比べて集落や住居の多様性が著しい。また、風土に対して必ずしも合目的的とはいえないような様式の集落や住居がある。こうした点が風土論でうまく説明できない部分ですが、集落や住居の多様性や多義性を説明する良い例がインドネシア、中国、アフリカなどにたくさんありますので、これからスライドを使って紹介したいと思います。

いつもですとこういうスライドは地域別あるいは様式別に分けて説明するのですが、今日は少し切り口を変えて、集落や住居がなぜそういう形態をとっているのかを表すキーワードを選び、そのキーワードから連想される集落を次々と、ちょうどインターネット上でネットサーフィンするような感じで紹介してみようと思います。

こういうのは、世界の集落や住居に関するデータベースが完備していれば容易に行うことができるわけですが、たまたま今年インターネット上で集落のデータベースを公開するというテーマが科研費に採用されています。最初は小規模に私の研究室のデータを公開してゆきますが、将来的には建築学会の建築計画委員会の中に比較居住文化小委員会というのがありますので、そのデータベースという形で、全国的な規模で研究者のデータを公開してみたいと思っています。

地域の概略について説明しますと、最初に城塞都市としてアラビア半島の西南端のイエメンと、北アフリカのモロッコ、それから中国の福建省の集落を紹介します。次に、離散型の集落としてメキシコとグアテマラの国境地帯のチアパス地方と、日本の四国の祖谷（イヤ）、それにイラクのアラブ川の河口付近の集落を紹介します。

次いで、いわゆる郷土材料と呼ばれる地元でとれる材料を巧みに使用した例として、南米のアンデス山中のペルーとボリビアの集落を紹介します。また、穴居住居としてスペインのアンダルシア地方のクエパスと、中国の窖洞（ヤオトン）を紹介します。

最後に、同じような風土の中に、さまざまな差異性が見られる例として、インドネシアのニアス島、スマトラ島、バリ島、スラウェシ島、スンバ島、ニューギニアのイリアン・ジャヤを紹介します。また、西アフリカのサハラ砂漠の南にあるブルキナファソの集落を紹介します。

人がなぜ集まって住むかという根源的なところから考えてみますと、その理由には、一つとして生産的な面から集団で住むことが有利であるということがあります。例えば農業を行うにしても、ある程度以上規模が大きくなると、

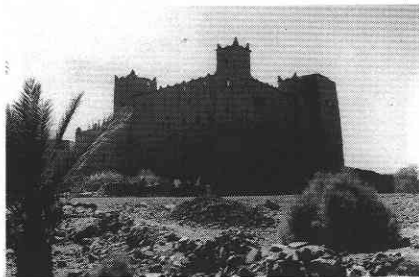


写真4 タンシクト（モロッコ）

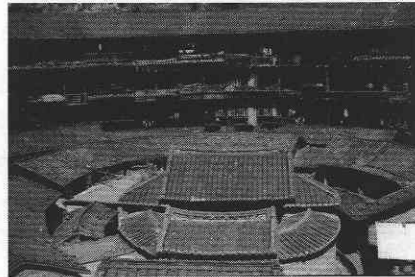


写真5 承啓楼（中国）

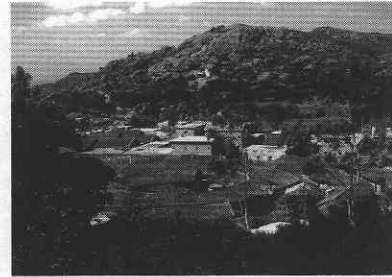


写真6 八卦堡（中国）

どうしても灌漑や地盤改良等の大規模の土木工事の必要性が生じますが、そのためには人手を必要とします。また、狩猟や漁撈を行うにしても、個人の技量でできる範囲には自ずから限界があり、獲物をたくさん捕るためには人々が連携して猟をする必要があります。

人間は社会的な動物であると言われていますが、これは一人ひとりでは弱いが集団を組むことにより強力になれるという意味です。

こうした事情により、人間社会では共同体というものが成立しているわけですが、集団を組んで相手をしなければいけないのは、自然の脅威や野性の動物だけではなく、むしろ一番恐ろしいのは他の人間集団であるというのが人間社会の特色です。

野性動物の場合でも群れの間で抗争というのがありますが、相手を完全に滅ぼすような極端な行為はふつうはとらないものですが、人間の場合にはジェノサイドとか平気で言うわけで、これに対する防御の必要があります。

防御の備えには2通りの考え方があり、1つは完璧に守りを固めて、もし外から襲われても守りぬくというやり方です。

これは、イエメンのシバームという街で、「世界最古の摩天楼都市」と呼ばれ、世界遺産にも登録されています。

この街はハドラマートというワジ(涸谷)の中に立地しています。この谷は全長200kmぐらいに及ぶ広大な谷で、街はそのほぼ中央に位置しています。すこし高くなった土手の上に立地していますが、四周を城壁に囲まれた町で、非常に密集した形で人々は住んでいます。

この地帯の歴史は創世記にまで及びますが、インドとヨーロッパを結ぶ重要な陸商路で、特に乳香の交易路として栄えていました。

この街は涸谷に立地していますので何度か大洪水に遇っています。13世紀と16世紀にかなり壊滅的な被害を受け、今の姿は16世紀以降にできたものです。したがって古いもので300年から400年の年代を経ています。

住居は土でできていますが非常に高層で、一番高いものは8階建てです。これは街全体を要塞化して共同体を守る例の典型的なものです。

この町は約7haに7,000人くらい住んでいます。ヘクタール当たり直しますと1,000人/haです。1,000人/haというのは、日本の集合住宅では広島基町の超高密度な集合住宅に相当します。

シバームの住居は、土と玉石を突きかためたもので造られています。壁が非常に厚く、下の方では1メートルくらいありますが、そのために断熱性が良く外は非常に暑いのですが中はひんやりとした気持ちいい空間になっています。

これもイエメンでハジャラという街です。イエメンでは山の頂上に城塞をつくる場合が多いのですが、これもその一つです。この街は、建物全体が石でできています。城門が見えていますが、入口はここしかありません。建物自体が城壁を兼ねたようなつくりになっています。

これはハジャラの建物ですが、全て石でできています。室内は、漆喰が白く塗られ、じゅうたんが敷かれ、ふつうのイスラム圏の住居とあまり変わりがありません。

次はイエメンの首都サヌアの旧市街ですが、これも世界遺産に登録されています。ここの建物は下3層くらいまでが石で、そこから上が日干しレンガでできています。特徴的なのは、カマリー窓というこの地域独特の窓です。カマリーというのは月を意味する言葉です。最近の窓は硝子が入っていますが、昔はアラバスタが使用され、アラバスタ越しの淡い光が月の光に似ているのでそういう名前がついたのではないかと思います。

これは300年くらい経っている建物です。断面図がありますが、1、2階が家畜小屋と倉庫になっていて、3階に男性用の客間があります。4階から上が家族のための部屋で、一番上にマフラージという望楼のような部屋があり、日中暑い時に男たちがここに集まってカートという幻覚作用のある葉っぱを噛んだり水煙草をふかしたりする場所になっています。



写真7 チアパス (メキシコ)



写真8 祖谷 (日本)

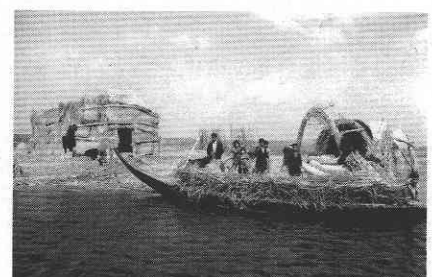


写真9 アブソウバット (イラク)

これはマフラージの内部です。窓にアラバスタが入っています。アラバスタは半透明ですので磨硝子状の淡い光が入ってきます。

こういう城塞は、もちろんヨーロッパにもたくさんありますし、イスラム圏にもあります。これはモロッコの建物で、俗にカスバと呼ばれていますが、ティグリムトと呼ぶのが正式な名前です。これは遊牧民に対する砦としてつくられています。

ティグリムトは外に対しては、銃眼の外に窓はほとんどないのですが、真ん中にドゥワヤという光井戸がつくられていて、ここから風や空気を内部に取り込む仕組みになっています。

ティグリムトのような巨大な建物は、日干しレンガでは構造的にもたないの、泥と小石と草の繊維などを混ぜたものを練りまして、それを型枠の中に流し込んで突きかためたピゼという泥のコンクリートでつくられています。壁のところどころに穴があいていますが、この穴は泥のコンクリートを打つための型枠のセパレーターの穴で、これがついているのはピゼでできているもので、日干しレンガに比べて非常に強固な建物になっています。上の方の物見塔やパラペットは荷重が軽いので、日干しレンガでつくられています。

次は中国の例で福建省のあたりに住んでいる客家（ハッカ）の集落です。客家は漢民族で、もともとは黄河の中流域の中原地帯に住んでいましたが、4世紀から5世紀頃に北の方から遊牧民（騎馬民族）が攻めてきたので、しだいに南下して、最終的に福建省と広東省と江西省の3つの省の境あたりの山中にたどりついた人々です。

客の家と書いて「ハッカ」と読みますが、その名が示すように、もともとその地域に住んでいた先住民族からすると招かざる客です。したがって客家は独自に外敵から身を守る住居をつくらざるを得なかったわけです。それでこのような円形とか四角い形の砦のような建物ができたわけですが、これを土の楼と書いて「とうろう」といいます。丸いのを円楼、四角いのを方楼と呼びますが、なぜ丸いのが

四角いのがあるかというと、これは風水師という風水の専門家がいて、その風水師が占って、ここは丸いのがよいとか四角いのがよいとかいって決めるようです、中には五角形や八角形のものもあります。

客家は、福建省出身といえはおわかりかと思いますが、華僑として海外に進出する意欲の強い人たちの集団で、古くは大平天国の洪秀全、最近では鄧小平、台湾の李登輝、シンガポールのリー・クワン・ユーなどの政治家は客家の出身だといわれています。

これは承啓楼という比較的綺麗な形で残っている土楼で、ここには一族郎党、親戚中がそろって住んでいます、したがって一つの土楼の中に住んでいる人は皆苗字が同じです。この承啓楼の場合ですと、黄さん一族が住んでいます。最盛期には600人くらい住んでいたようです。

外から見るとすぐわかるように、1, 2階の部分にはほとんど窓がなく、上の方に物を落したり、弓を射たりするような窓が少しついているにすぎません。これも先ほどのピゼと同じで土と玉石を一緒につきかためてつくられていて、最下層の壁の厚さは1メートル半くらいあります。

内部は、非常に幾何学的な形をしていて、真ん中に祖堂という、祖先をお祭する祠があります。その周りに住居が並んでいますが、その内側に二重にあるのが、厨房や豚小屋です。これは4階建てですが、面白いのはその使い方で、一つの家族の部屋が横方向に並んでいるのではなく、縦方向に重なっています。1階部分はたいいてい厨房になっていて、2階が米倉で、3, 4階が居室になっています。一つの家族の部屋が縦方向に積み重ねられていますので、ある部屋から別の部屋に行こうと思えば、いったん廊下に出て、この廊下を「走馬廊」といいますが、この廊下を通して階段にゆき、そこを登り降りして別の階の走馬廊に出て、そこを伝って目的の部屋にたどりつくことになります。これは非常に均質な住戸の割りになっていますが、このように均質に割ることにより600人が住むような大家族をうまくまとめてゆくことができたのではないかと考えています。



写真10 チチカカ（ペルー）

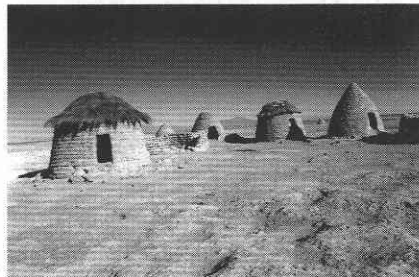


写真11 チパヤ（ボリビア）



写真12 クエバス（スペイン）

客家の円楼や方楼の形を風水師が決めるといういましたが、客家の土楼の中には形そのものが風水になっているものもあります。中国には風水に基づいてできた街は一つもないといいますが、これは集落の形が風水になっている例です。

この形は何を表しているかという、風水で占うときの爻（コウ）です。最近あまり見かけませんが、易者が筮竹をじゃらじゃらいわせ、2つに分けて偶数か奇数かで占いますが、その時の陰陽を表わす横画が爻です。偶数か奇数かの判断を3回おこなうと2の3乗で8通りのパターンができます。それをさらに2組合わせると8の2乗で64通りのパターンができますが、最初の8通りを八卦といい、64通りを六十四卦といいます。この集落は八卦の爻を表して「八卦堡」という名前がついています。これも客家の集落で、大体200年前にできたといわれている村です。中国でもこのように「八卦」をそのまま形にした村はここしかないようですが、現在でも400人くらいが住んでいます。

いままでの集落は、武装して村を守ろうという発想に基づいていますが、逆に武装しないで村を守ろうという発想もあります。メキシコとグアテマラの国境地帯のチアパス高原の風景と日本の四国の祖谷（イヤ）です。祖谷は、四国の中央に剣山という山がありますが、その南側の斜面にある集落で、これは最近の写真で、かなり住居が増えていますが、私が20年前に行ったときはもっとまばらでした。第一印象はメキシコに似ているなというものでした。

これらはどういう構造の集落かといいますと、先ほどの要塞化した集落が、どこが中心かを明らかにして、そこさえ守れば良いという構造だったのに対して、これは離散型と呼んでいますが、逆に意図的に集落の中心を消して、どこが中心かわからなくするという構造になっています。同じような大きさ、形の家がバラバラと山の彼方まで点在している構造では、例え襲われたとしても相手がどこを襲えば最も効果的かと迷っている間に大半は逃げのびることができます。チアパスに住んでいるのはインディオです。メキシコの場合、平地の肥沃な土地は白人もしくは白人とイ

ンディオの混血のメスティーソが占めていて、純粋のインディオは、山の中に追いやられています。社会的な弱者ゆえに、こうした離散型の集落をつくっているわけです。

日本の祖谷は、平家の落人伝説のあるところで、追われた者たちが山の中に住み着くには、このような離散的な配置をとらざるをえなかったのではないかと思います。

山の中ではなく、水の上に逃げた例がイラクのアラブ川の河口付近のラグーンにあります。ここではラグーンの中に人工的な島をつくっていますが、一つの家族が一つの島を持っています。これもどこが中心かわからない離散型の配置になっています。アラブ川の河口地域は昔から抗争の絶えない地点で、最近ではイラン・イラク戦争で、また湾岸戦争でも、このあたりが主戦場になっています。こうした地域で、このタイプの住居は古い家の絵が残っていますが、5千年くらい続いています。

素材は付近に生えている葦です。どのようにつくるかという、葦の束を平行に2列立て、その上端を結び合わせるとアーチができますが、それをフレームにして上にむしろをかけるとかまぼこ型の建物ができます。この島の上には、牛や鶏も同居しています。

島と島との交通は当然カヌーでしか行えませんが、これは攻める方からすると極めて攻めにくい構造の集落になっています。

これはマディフと呼ばれるゲストハウスで、村にお客さんが来たときに使用されます。日常的には男性の憩いの場で、同時にモスクの役割も果たしています。

葦の住居が出たついでにもう少し葦の住居の話をします。これは南米ペルーのチチカカ湖のウロ族の住居で、先ほどのイラクの住居は島でしたが、これは浮き島です。最近丸太の杭を打ち込んで動かないように止めていますが、元来は浮き島で、島ごと移動していました。

このウロ族は、湖に生えている葦、「トトゥラ」を生活のさまざまな局面に利用しています。島自体2、3メートルの厚さにトトゥラを積み重ねたものです。住居もトトゥ



写真13 密洞（中国）



写真14 南ニマス（インドネシア）



写真15 北ニマス（インドネシア）

ラをむしろ状に編んで、それで屋根も壁もすべて葺きます。

炊事をしていますが、炊事のときの燃料も乾燥したトトゥラを使います。パルサと呼ばれる舟が見えてますが、この舟も全てトトゥラで作ります。

トトゥラは生のままで皮をむくと、白い芯が出てきますが、これはサクサクした歯応えで子供のおやつになります。

身近にある素材、いわゆる郷土材料をうまく活用するのが伝統的な集落や住居の特色ですが、これは同じく南米ボリビアのチバヤ族の住居です。チバヤ族が住んでいるのは3,800～3,900m くらいの高地で、白く見えていますが、もともとは湖であった所が干上がったソルトレイク（塩湖）です。土地が塩をたくさん含んでいるので、ほとんど植物は育たなく、唯一生えているのが、黄色く見えている、チャンパと呼ばれる芝草です。こうした不毛の地ですが、チバヤ族はこのチャンパを利用して住居をつくります。

どのように作るかというと、先ずスコップで芝土に切れ目を入れます。次に土を、芝草もろともすくい取ります。芝草の根が張っているのが比較的安定した土の塊が得られます。これはちょうど日干しレンガのようなものでソッドと呼ばれますが、これを建材として用います。

日干しレンガやソッドでつくった住居は断熱性が高く、冬温かくて夏涼しいという性質がありますが、より直接的に土の中に住んでいる人々もいます。

これは、スペインのアンダルシア地方のクエバスという住居で、崖が見えていますが、この崖に横穴を掘り、それを住居にしています。穴の中に住んでいるので換気の必要性があります。厨房や居間の上に換気塔を立てています。それらが、丘の上に登りますと、こうしたシュールな形とになっていくつも見えています。

内部は、ボルト状に掘りこんで、表面を漆喰で白く塗っていますので意外に清潔な感じがします。部屋が必要に

なればどんどん掘り足してゆけばよいという、容易にできて増築可能な住居です。

穴の中に住んでいる人は世界中にいますが、これは中国の例で窖洞（ヤオトン）です。下沈式窖洞で、地表面はこのレベルです。垂直な堅穴を掘り、その周りに部屋を掘り込む形式です。黄土はあまり堅くなく脆いものですが、このように垂直に切ると法面は崩れません。入口は別にあり、斜路を通して堅穴の底に出ます。窖洞の部屋もボルト状になっています。

このように伝統的な集落では郷土材料をうまく使って住居を造っていますが、同じような風土にあっても全く違う形式の住居が造られていて、材料と形態の関係を考えるヒントになる集落があります。その例としてインドネシアの住居をいくつか紹介したいと思います。

これはスマトラ島の西の方にあるニアス島という直径100キロほどの小さい島の南部に住んでいるニアス族の住居です。彼らはもともと首狩りの風習のあった部族で、他から襲われないように、山の尾根線沿いの急峻な所に住んでいます。山の尾根に沿って道があり、その両側に住居をつくっています。

住居は高床で、床下に奇妙なプレスが見えていますが、この上に箱のような形で居室が載っています。

こういう高床の住居は、一般的に3層のコスモロジーに対応しています。床下が地下界、床上が人間界、屋根裏が天上界でそれぞれに家畜、人間、祖霊が住んでいます。

戦士が跳石を跳び越えている写真です。道の真ん中に台形の跳石があり、手前に踏切用の石があります。勢いをつけて走ってきて、踏み切石を蹴りいっきに跳石に触れないで飛び越す練習をしています。

これは何の儀式かと言いますと、先ほど首狩りを行っていたといいましたが、他の部族も襲われてはかなわないので集落の周りに竹で囲いをつくって備えています。ニアス族は襲うときにその竹垣をいっきに跳び超えて襲ったようで、その訓練をしているわけです。男の子はこの跳石を跳び越えられないと大人として認められません。大人



写真16 カロ・バタック（インドネシア）



写真17 バリ（インドネシア）



写真18 スンバ（インドネシア）



となるためのイニシエーションの儀式ですが、その名残りが今でも残っています。

ここでは屋根が、サゴヤシで葺かれています。その一部がトップライトとして持ち上がるようになっています。

これは屋根材のサゴヤシですが、ヤシの葉の真ん中に竹を挟んで2つ折りにして、それを縫い合わせています。こうするとをちょうど瓦のようなユニットができ、これで屋根を葺くわけです。

先ほどのニアス島の南部の集落でしたが、小さい島ですが、北部には全然違うタイプの住居があります。これは北ニアスの住居で平面が楕円形をしています。楕円形の平面は比較的珍しく、居住部分が桶のような形をしています。これも高床ですが、足元のプレスの組み方は先ほどの南ニアスとは全然違うのがすぐわかると思います。屋根は同様にサゴヤシのユニットで葺かれています。

これはインドネシアのスマトラ島北部のカロ・バタック族の住居です。これも同じく屋根をヤシで葺いていますが、これはサトウヤシの繊維で葺いています。

サトウヤシは、シュロを太くしたようなヤシで幹が黒い繊維でおおわれています。この繊維を集めて屋根材とします。このカロ・バタック族もやはり高床で、床下と床上と屋根裏の3層に分かれています。

平面はユニークで、両端にベランダがあり、そこから上って入ります。真ん中に通路があり、この住居ですと4カ所炉があります。この炉は両側から2つの家族が使います。したがって、この住居には8家族が住んでいます。内部はパーティションも何もないひとつの空間になっています。

住居は通路の軸線が近くを流れる川の川上に向くように配置されます。

これはバリ島ですが、インドネシアでもバリ島はちょっと特異で、バリ島とロンボク島はイスラム教ではなくバリ・ヒンドゥーというヒンドゥー教を信じています。した

がって、宗教的な面からかなり空間的に異なっています。

いままでは全て高床の住居でしたが、バリ島の住居は、30 cm から 50 cm くらいの基壇はありますが、いわゆる地床で高床にはなっていません。

バリ島の住居は方位性を持っています。どのような方位性かという、バリ島には中央にアグン山という聖なる山があります。このアグン山に向かって山側が聖なる方位で、海側が不浄の方位です。したがって島のどこにいるかによって聖なる方位が異なるわけで、例えば島の南の方にいますと北にアグン山があり、北側が聖なる方位になりますが、島の北側にいますと南にアグン山があり、南が聖なる方位になります。こうした山・海の方位軸と、もう一つ右・左の方位軸があり、基本的に山に向って右が聖なる方位で、左が不浄な方位というふうに分かれています。

この方位観のもとに一つの屋敷がいくつかのゾーンに分かれていますが、山に向かって右側が最も聖なる場所で、ここには祖先の霊を祀る祖廟があり、祠が並んでいます。

これは祖廟の入口で、結界を示すシンボルの割れ門があります。2つに裁ち割った形の門は、そこから奥が聖域であることを明示しています。

これはもう少し東にあるスンバ島の住居です。これも高床で床下と床上と屋根裏と3層に分かれています。特徴的なのはとんがり屋根で、ここにはマラブという神様が住んでいます。マラブは白檀の木でつくった小さな像や、宝石や貴金属ですが、それぞれの家族が守り神を持ち、それを屋根裏の部分に祀っています。そのためにこうした奇妙な形の屋根を持つ住居ができています。

スンバにも右と左という考え方があり、入口が2つあります。向って右側が男の入口で左側が女の入口です。これは男の入口ですが、この水牛の頭骨を踏んで入るようになっています。

内部は、これは新築中のものですが、竹が多用されていて、竹のしなりで高い屋根を支えています。



写真19 タナ・トラジャ (インドネシア)



写真20 イリアン・ジャヤ (インドネシア)

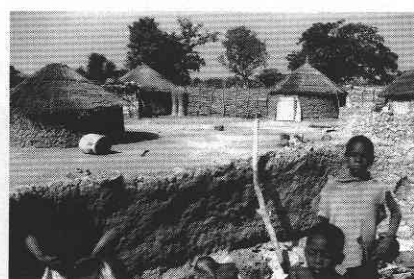


写真21 ボグー (ブルキナファソ)

これはスラウェシ島のタナ・トラジャ族ですが、ここでも竹がうまく使われています。こちらがトンコナンと呼ばれる建物で主屋です。それに対面する形でアランという米倉があります。スラウェシ島は南半球にあるので、トンコナンが向いている方向が太陽の方向で北です。

トンコナンやアランには鶏や水牛の顔が描かれています。それぞれに宗教的な意味があります。また黄色や赤、黒、白などの色が施されていますが、各色にはそれぞれに意味があります。

ここの屋根は、竹をひごでつないで瓦状にしたもので葺かれています。新築中のものがありますが、このように積み重ねてゆきます。

更に東に行くと、イリアン・ジャヤがあります。ニューギニア島の西半分ですが、この山中にダニ族が住んでいます。これは1930年代に始めて発見された部族で、今でもこうした裸に近い格好の人が町中を歩いています。このダニ族の住居が非常に特殊で、ここに一つ大きな棟がありますが、これは男の棟です。周りにいくつか小さい丸のがありますが、これは女の棟です。男は成人しますと集団で男の棟に住みます。女の棟には基本的には成人女性が1人とその子供が住んでいます。

周辺にある細長いのは豚小屋と厨房です。こういう形式の住居をコンパウンドと呼びます。中庭があり、その周りにいくつかの要素が並ぶものがコンパウンドで、コンパウンド形式の住居は世界的には珍しいものです。

これは先ほどの男の棟ですが、この中には26人の男が集団で住んでいます。

その内部ですが、2層になっていて、これは1階部分です。1階部分は真ん中に炉があり周りに男たちが集まる居間になっています。この上に2階があり、2階は寝室になっています。

ダニ族のコンパウンドを見ましたが、コンパウンドの本場はアフリカで、これは西アフリカのものです。



写真22 サバ (ブルキナファソ)

コンパウンドは、こういう形でいくつかの棟が集まり、それが1つの集団になっている形式で、これは大家族制度に対応しています。基本的には1つの棟に1人の成人の男性か女性が住んでいます。

大きな壺がありますが、これは穀倉です。穀物を入れておくための壺で、ほとんど住居と同じくらい大きさのものがつくられています。

これはブルキナファソのコンパウンドです。住棟がぐらりと中庭を取り囲んでいますが、周縁部分に建てる場所がなくなったので、中庭部分にまで住棟が進出してきます。家の前に壺や薪が散在しているのは女の住棟です。それらが無いのは男の住棟です。

これはその中庭ですが、風除が見えています。この風除けがあるのは女の住棟で、ここで煮炊きをします。

真ん中に一棟あるのは、粉引き小屋です。

先程のは丸い棟からなるコンパウンドでしたが、四角い住棟と穀倉をもつコンパウンドもあります。真空管のような格好をしているのが穀倉です。丸太が突き出ていますが、これを足場に穀倉の中に穀物を入れます。

コンパウンドには面白いものがたくさんありますが、これもブルキナファソのものです。非常に複雑なコンパウンドで、外から見ると円筒がいくつも重なっているようにしか見えませんが、中に入ると、こういう形で円筒状の住棟がいくつもあります。

プランをみると、こういう形になっていて、これが寝室です。この寝室に対して周りにあるのが厨房や倉庫で、これが一つの住棟に相当するものになっています。

どうしてこのような複雑な形ができたかという理由は、家族構成を調べてわかりました。この家の主人はこの棟に住んでいます。この主人には5人の奥さんがいますが、この5つが5人の奥さんの住んでいる棟です。主人には弟がひとりいます。弟はこの棟に住んでいます。弟には奥さん



写真23 テナド (ブルキナファソ)



が4人いますが、彼女らの棟がここに並んでいます。このように複雑な家族制度に対応したコンパウンドになっています。

以上見てきたように世界には様々な住居があります。簡単にまとめると、伝統的な集落や住居は、宗教やコスモロジー、空間概念、社会制度、あるいは家族制度等のさまざまなものを反映していて、必ずしも風土だけで決まっているわけではないということです。

確かに風土は、集落や住居をつくる際の大枠を決めますが、その大枠の中でどのように共同体を形成してゆくかは、それぞれの住民や部族に選択の余地が残されていて、どの途を選ぶかにより、こうした多様な住居や集落ができているのではないかと思います。

様々な集落を見てきましたが、自然条件の厳しい所ほど、我々の目から見ると面白いものがあります。風土的な条件

の厳しい所では、よほど創造力を働かせて巧妙に仕組まれた集落や住居をつくらないと、共同体として生き残れないという事実を表しているのではないかと思います。

単純な『風土論』では、条件を与えると答えは1つに決まるはずですが、このように多様な集落や住居が併存していることを考えると、風土を超えた形で人間の構想力や創造力が発揮されていて、それがそれぞれの住民や部族の持つ文化として現れているのではないかという気がします。

集落や住居を見るときに、風土は一定の大枠を決めるが、そこから先の部分においては、住んでいる人々の意識や意欲がより強力に発揮されていて、それが文化として見えているという眼で見てゆくといいのではないかと考えています。

長い間ご静聴ありがとうございました。